

平成29年度佐久理科同好会臨地研修

千曲川源流・甲武信ヶ岳の自然

佐久穂小学校 酒井 啓喜

期日 6月19日(日)

参加者8名

友野 増夫(川上中)	友野先生奥様	齋藤義和(川上二小)
中山 厚志(佐久東小)	酒井 啓喜(佐久穂小)	庄司重雄(望月小)
関口 博子(中佐都小)	平林 英典(軽井沢東部小)	

朝5時30分に杉の木貯水池駐車場で中山先生と待ち合わせをし、川上村へと向かった。6月の川上村はそれこそレタスの収穫真っ盛り。整然と並んだレタスに大きな農耕車。これで晴天だったら最高であったが、むしろ登山をするには好都合だ。7時前に毛木平の駐車場に行くと、すぐ入口脇にベニバナイチヤクソウがお迎えをしてくれた。一大群生地である。この分ならこの先にも咲いているだろうと先を急ぐと、驚いたことに駐車場はほぼ満車であった。恐らく車など一台も停まっていないのではと思っていたのに、県内外から千曲川源流に目指して多くの方がやってきているのだと思い知ることになった。



毛木平のベニバナイチヤクソウ

嬉しいことに飛び入りで駆けつけてくださった先生方も含めて8名となった。にぎやかで楽しい登山になりそうだ。登山道に入るとすぐ分かれ道である。迷わず千曲川源流方面へ。

これから、長丁場の登山の始まりである。元気に帰ってこられるだろうか。不安と期待が入り混じる中、先ほど見たベニバナイチヤクソウを探すか、一向に見つからない。辺りは新緑の芽吹きを過ぎ、葉が盛んに生い茂っている。鳥の姿は見えないが、まだまだ鳴き声は盛んに聞こえる。シジュウカラ、ハシブトガラス、ホオジロ、オオルリ、ミソサザイ、カケスとわずか歩くうちに、次々と鳴き声が楽しめる。流石は千曲川源流である。

何と言っても特筆すべきは、辺りの植生であろう。シカの食害が叫ばれて久しいが、ここも随分とひどいものだった。辺りは「天然の芝刈り機」の様にきれいに刈り込まれている。残っているのは、毒草(トリカブト・バイケイソウ・ハシドコロ等)かトゲのある植物か、極端に小さい小型の植物だけである。つまり、シカの食害から身を守ることができるものだけが生き残っているのである。帰り道に網で保護されている

区画があったのだが、そこは一面が緑でいっぱいであった。こんなにも違うものかと驚きを隠せなかったが、それだけシカが広範囲にわたり植生を変えてしまっているのだということを思い知った。

千曲川源流まではゆるやかな坂道が延々と続く。ウリハダカエデ、カツラ、シラカバ、カラマツ、イタヤカエデ等、様々な樹木の特徴を確認しながら登っていくのも楽しい。マタタビの白い葉が新緑の中に存在感を示している。コメツガ・シラビソ・オオシラビソの種類の違いを見分けられるようになって、子どもたちに話したいなあと、少しでも身につくようにメモをとる。



三宝山の山頂

「時期が早すぎたかなあ。」と、中山先生。この時期にみられるランが今回の目玉の一つであったとのこと。まだ時期が早く、あまりランが出ていない。しかし、途中でイチヨウランに出会えた。準絶滅危惧種とのこと。白く可憐な花卉の中に薄紫の模様が映え、周囲の苔の中で凛として立つ姿はひと際存在感を主張していた。

中嶋豊さんのイラストマップも参考にしながら、ひたすらゆるやかな山道を登る。ようやく滑滝である。なめらかな巨岩の上に腰を下ろし、休憩をした。座ってしまうと暫く立ち上がれない。日頃の運動不足は否めないようだ。先生方に飴を配ろうと歩いて回ると、水と苔とでツルツルの岩で全く進めない。バランスを崩して、危うく川に落ちそうになってしまった。流石は滑滝。ナメてはいけないなと実感した。

頑張って歩き続けると、必ずご褒美がある。今回はそのことを何度も実感した。滑滝を過ぎてから千曲川源流へ。丸太橋を渡る時にコマドリと遭遇するなど、ここでも野鳥の観察は十分楽しめる。あれだけ多くの水を湛えていた千曲川の流れが、次第に小さくなっていく。小川のようにサラサラと流れる音を聞きながら、いよいよ源流に近づいたんだという手ごたえを感じる。透明な水はまさに清流。倒木や石が苔むした世界は、一体どのくらいの時間がかかって作られたのだろうか。夢中でシャッターを切った。

サラサラ流れた小川はいよいよチョロチョロとした流れになってきた。もう源流はすぐそこに違いない。「千曲川信濃川水源地標」が目の前に現れ、いよいよ到着した。ここまでよく歩いた。ここで一休みである。この水を飲むために、ここまで歩いてきたのだ。水源に降りていくと、確かに水源から上流は水がない。下流は水がある。確かに水源だ。ここが。

こここのところの空梅雨の影響か、一番の水源は枯れていて、1mほど下から水が染み出していた。源流は長く手を入れていられないほど冷たかった。キンキンに冷えた水を水筒に汲んだ。ここまで歩いてきた甲斐があった。疲れた体は源流の湧き水ですっかり回復した。

以前の夏期研修講座はここで引き返したのだが、今回はここから更に「甲武信ヶ岳」を目指す。歩き

始めてから20分。いきなり急峻な山道が私たちの疲労困憊した足腰を襲った。息が上がり、この道がいつまで続くのかわからない不安と闘いながら、とにかく登る。
厳しい坂道も尾根まで出たら終わりである。

源流から約1時間。とうとう甲武信ヶ岳登頂である。甲州・武州・信州の3県にまたがる甲武信ヶ岳。富士山が目の前に見える眺望は、ここまで登ってきたものでないと味わえない。千曲川源流も最高だが、この甲武信ヶ岳からの眺めはまた格別である。大変面白かったのは、甲武信ヶ岳にある山頂柱である。埼玉県側に立つ山頂柱は実に立派である。埼玉県で一番高い山ということから、丁寧な扱いをされているようだ。



富士山が見える

甲武信ヶ岳の山頂での眺めをしばらく堪能してから、いよいよ下山。というか、ここからが厳しい帰りの始まりであった。急な下り坂や岩場を降りていきながら、また登り。ここから三宝山、武信白岩山、大山と3つの山の昇り降りである。しかも、鎖を使って数メートルの岸壁を降りたり、足を滑らせたら終わりというような尾根を渡ったりと、結構スリリングな「リポビタンD」の世界を地で行くような楽しいコースであった(笑)。

なかなか過酷なコースではあるが、ここでもがんばった分最高のご褒美に巡りあえた。それは、アズマシャクナゲの群生地である。花束のような見事なシャクナゲの花。ピンク・赤それぞれの株で色合いが異なるが、それがまたコントラストになってえも言われぬ美しさである。未だかつて、こんなに美しい辺り一面シャクナゲの世界に立ち会ったことはなかった。



この時期にしか咲かないアズマシャクナゲ

笑えたのは「尻岩」である。数メートルもある巨岩であるが、名前の通り、見た目が「お尻」のような形をしている。一体だれが名付けたのか、しかし、言えて妙である。誰が見ても「尻岩」。昔の人も、今の人も、同じような感覚をしていたんだろうと、そんなことを考えながら、癒された帰り道であった。

十文字小屋から八丁坂。28回も左右に曲がるクネクネ道を降りていく途中に、対岸の草むらから「ガサガサッ！」

という音がした。クマか？

一瞬ひやりとしながら静かにしていると、その音の正体はシカだった。大きなメスのシカが、ろくに食べるようなものがない急坂の草をむしり取っている。

と、後ろから「ピューイ！！ピューイ！！」というけたたましい音がした。鳥にしては大きな声だ。後ろを振り向くと、そこにはもう一頭のシカが！警戒するように呼び掛けたのだろう。シカの食害を目の当たりにしてきたこの登山であるが、その本人と日中にばったり会うとは思ってもよらなかった。
(シカに会えたのはちょっと嬉しくなってしまったが)



出会ったニホンジカ

そして、とうとう10時間。朝7時に出て午後5時到着である。よく頑張った！自分で自分をほめてあげたいと思いながら、仲間の先生方と無事の帰還を喜び合った。こうした登山も、理科同好会の先生方の呼びかけがなかったら、行くことはなかったと思う。今回、こうして登山に出かけられたことを、本当に幸せに思う。

佐久教育会、理科同好会、参加してくださった先生方、そして中心に動いてくださった中山先生に心から感謝します。ありがとうございました。



<出現鳥類> 23種

シジュウカラ ヒガラ コガラ ゴジュウカラ エナガ 多くさえずったルリビタキ
アカゲラ コゲラ
カケス ハシボソガラス キジバト
ミソサザイ (多い) キセキレイ ウグイス ホオジロ メジロ
キビタキ オオルリ (多い) キクイタダキ
ホシガラス ルリビタキ (多い) メボソムシクイ コマドリ (多い) ウソ